

AsiaWave

 vol.164

Life&Culture 16

4

特集 台湾 陳水扁の8年 和仁廉夫

2

チベット写真館
秋山雄一
4000km バスの旅

孫秀萍
聖火、聖火
ラフマン、愛
インドネシアでも価格高騰中
桂川唯香
ホームステイがしたいだけ3
村田広幸
タイ湾を望む
亞洲奈みつほ
映画「一九七八年、冬」
『今、愛する人と暮らしていますか?』
北朝鮮 シリアの核開発を支援
中川昌俊



世界の屋根の少女達

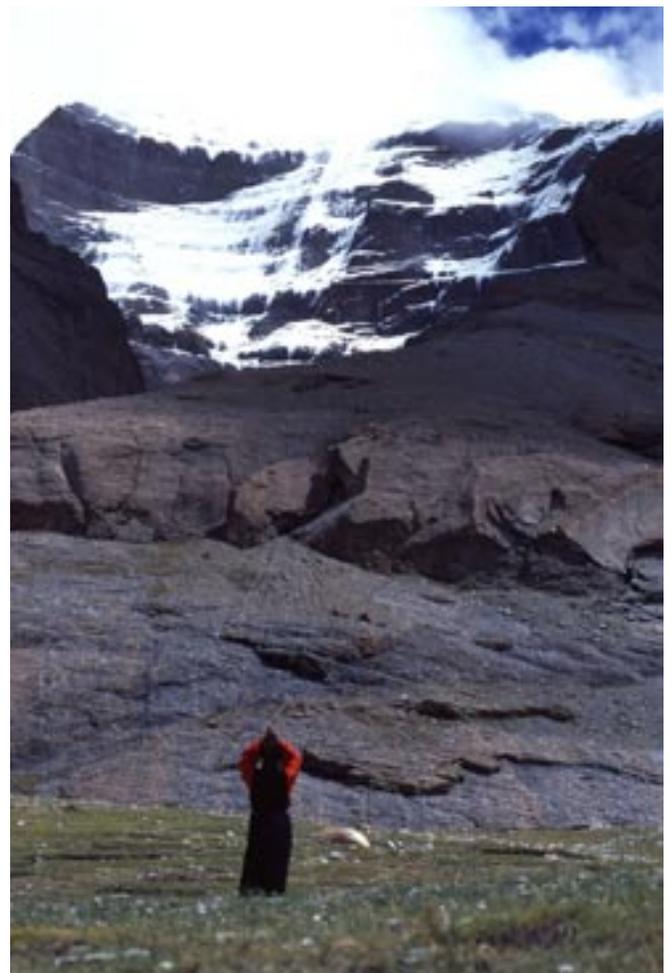
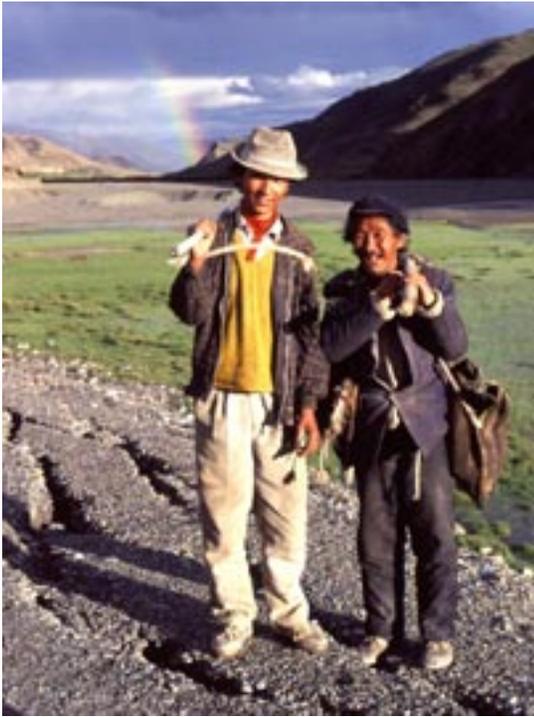
(中國タクヤ撮影)

チヨモランマ。チベット語で「大地の母」を意味し、その姿は神々しい。ベースキャンプ手前7km弱に位置するロンボク寺。標高5030mもの高地に100年ほど前に建てられたこの寺院は、世界最高地にある宗教施設といわれている。

新世紀を迎えた2000年の夏。チベット横断中の僕は、この土地を訪れた。当時ここは、寺院と小さなゲストハウス、あとは長屋風の民家があるのみ。宿では、夜間数時間しか電気は通じず、もちろんシャワーはない。トイレは断崖そばの小さな小屋で、扉も仕切りもなく、床に穴が二つあるのみ。数十メートル崖下から吹く氷点下の寒風が、その穴を抜けて尻を撫でる。食事は基本的には提供せず、カップ麺が市価の倍以上で販売されている。そして、外に出て見渡すと岩山に囲まれた荒涼かつ荘厳な風景。そんな心身ともに寒くなるこの土地で、心とまかせてくれたのは和気藹々とした従業員の少女達。僕には一泊だけで気が滅入るこの土地でも、住めば都なのか。

このチヨモランマを、北京五輪の聖火リレーが5月上旬登頂するぞうだ。これを機会にベースキャンプまで舗装道路を造り、一帯にはお土産物屋やホテルなども建てて、観光地として開発するらしい。僕の中では神々しく荘厳な風景とこれらの人工物が結び付けられない。聖地を政治と金儲けの道具にするその感覚には驚かされるが、逆に唯物論の彼らにはそっちの方が理解できないことなのかもしれない。

秋山雄一の
チベット写真館



成都ー拉萨ーカイラス、4000kmバスの旅
見えない明日を迎える毎日
チベット人が言う
「バスなんかで来る奴ははじめてだ」
旅の終盤に、バスはもう動かなくなっていた
僕達も同じように疲れ果てている
誰もが言う
「そんな無茶なことを……」
チベット人のやさしさに支えられた
40日間チベット横断



秋山雄一のホームページ: <http://www3.point.ne.jp/~akky/>
<http://hey.to/akky>

台湾／陳水扁の8年

文・写真 和仁廉夫 (ジャーナリスト)



2000年3月の総統選で、陳水扁候補が当選。党幹部を率いて初の記者会見に臨んだ。

◆党外運動の強者たち

写真は二〇〇〇年三月の総統選挙に勝利し、半世紀にわたった国民党一党専制体制から平和的に政権交代を遂げた陳水扁・呂秀蓮正副総統候補が、台北市内の民進党総統選挙本部で初の記者会見に臨んでいるところ。党外運動以来の民進党幹部が勢ぞろいした、歴史的な場面だ。

前列でマイクを握るのが、当選もない陳水扁総統、その右に呂秀蓮副総統。陳總統の左には呉淑珍夫人。陳總統が入獄していた時期には民進党立法委員をつとめていた。一九八五年に夫が台南県長選挙で落選したおり、謝票（台湾で選挙民に挨拶する慣行）で街頭に出たところ、白色テロと見られる交通事故に遭遇。下半身不随となり、現在は車椅子生活。陳總統とはおしどり夫婦として知られる。

その左には林義雄民進党主席（当時）。野党時代の民進党主流派閥だった美麗島派（穏健派、現「緑色連誼会」）を率いる人格者で、キリスト教の聖職者でもある。美麗島事件で入獄していた八〇年、留守宅を暴漢が襲い、実母と二人の娘を殺害された悲劇（林家血案）で知られる。

後列左から二人目の女性が二〇〇六年に高雄市長に当選する陳菊。そして一人おいて陳總統の後方に立っているのが謝長廷高雄市長（当時）。陳總統と同じ弁護士出身、美麗島事件の弁護を機に党外運動に身を投じたところも似ているが、弁がたち、華がある陳總統とは対照的に、穏和な実務家である。その謝長廷が、八年後の総統選では主役をつとめた。

◆台湾変天―国民党専制史と陳水扁政権成立の意義―

台湾の正式名称は中華民国。一九一一年の辛亥革命で成立した漢族の政府だが、第二次世界大戦後の国共内戦に敗れた蒋介石が国民党軍を率いて台北に逃れてきた。中華民国が実際に管轄しているのは台湾省と金門島、馬祖島など福建省の一部。中華人民共和国と政治的、軍事的に対峙してきたため、なかく中国国民党による一党支配体制（戒厳体制）が続いてきた。

サンフランシスコ講和条約が発効して日本が国際社会に復帰した五二年。日華平和条約で日本との国交を樹立したが、七一年に国連で中国加盟と台湾追放を求めるアルバニア決議案が可決され、国連を脱退した。七二年の日中国交正常化で日本とも断交。日本との関係は民間の日台交流協会と台湾駐日経済文化代表處が相互にビザなどの領事業務を行っている。現在、中華民国と外交関係のある国はわずか二三カ国。

台湾内部では、四七年に国民党とともに台湾に移住した中国人（外省人）は台湾全人口の十三％程度。残りの大部分を本省人（台湾省出身者）が占めるが、多数を占めるのは、十七世紀に廈門など福建省南部から移住して土着したミンナン系台湾人だ。次いで多いのが、中国の中原地方の漢族に由来するという客家の人々（ステージ写真参照）。彼らは主として桃園・新竹県に暮らす、新参者の



2000年3月 陳水扁、呂秀蓮正副総統候補が当選。半世紀にわたった国民党専制から、民主的な選挙での「台湾変天」（政権交代）が実現した。当選を決めた夜、民進黨のステージで台湾式の万歳で感謝をあらわす二人。

ため、ミンナン系とは対立することが多かった。このほか十四部族が公認されているポリネシア系の原住民が山間部を中心に散在する。台湾はこれら複雑な族群が入り乱れ、長い「械闘」（部族抗争）を繰り返してきた歴史があった。

戦後半世紀にわたって台湾を支配した国民党政府は、少数の外省人が多数の台湾人を支配した「倒立した体制」であった。国共内戦以来続く戒厳モードのなか、国民党は在来の台湾人を差別し、彼らの民主化要求を抑圧しつづけた。四七年の二・二八事件をはじめ、白色テロ事件は枚挙に暇がない。

国民党政府に対し、台湾人による解放闘争を党外運動という。台湾の民主と独立を求めて闘ってきた彼らが八六年に非合法下で組織したのが民進党である。翌八七年には蔣経國総統の決断により戒厳体制が解かれ、民進党は合法政党となった。その蔣経國の急死後、総統に昇格して民主化を推し進めたのが李登輝だ。ミンナン系と客家の血を引く本土派の李登輝総統は、党外勢力を巧みに利用して国



2000年3月の総統選投票前夜の民進党総決起集会。陳水扁候補を応援する人々。

民党の本土化（国民党化）を進め、立法委員、県市長、総統選挙などに普通選挙を導入。こうした環境のもと、民進党は立法院や地方首長、地方議会に次々と代表を送り出し、政治的経験を積み上げてきた。

その集大成が二〇〇〇年三月の総統選挙。国民党分裂の間隙について民進党の陳水扁・呂秀蓮正副総統候補が当選。ついに平和的な政権交代（台湾変天）が実現したのだ。



民進党陳水扁候補の当選は、国民党分裂による「漁夫の利」政権であるとして、惜敗した宋楚瑜候補（無所属）の陣営を中心に、分裂の元兇（げんきょう）となった李登輝総統に対する批判が高まった。写真は総督府前広場（ケタガラン通り）に集まって、李登輝総統の国民党主席辞任を求める人々。



2000年3月の総統選投票前夜。民進党総決起集会でステージに上がった客家（ハッカ）の代表たち。台湾社会には複雑な族群対立があるが、この選挙で客家票を一番多く獲得したのは、民進党の陳水扁候補だった。

李登輝糾弾集会で、李登輝総統の国民党主席辞任を求める標語のマスクを装着した拳村（けんそん）の若者たち。

拳村とは、1947年以降、中国大陸から台湾に逃れた国民党軍下級兵士の家族たち。外省人エリートとは異なり、台湾各地の都市部の一角に集住して、外省人村（拳村）を形成。土地などの資産がない状態からスタートしたため、大変な辛酸をなめた。

有名人では、歌手で、のちに謎の自殺を遂げたテレサ・テンさんの家族の境遇が、これにあたる。



◆暗殺陳水扁―中間評価歪めた陳總統銃撃事件の謎―

○四年三月十九日、總統選挙を翌日に控え、再選目指して掃街（街頭パレード）中の陳水扁・呂秀蓮正副總統候補の乗った宣伝カーが、台南市内で何者かに狙撃されるといふ、前代未聞の事件が発生した。

負傷した陳總統は何事もなかったかのようにその後もしばらく掃街を続け、隣の奇美病院に緊急入院。呂副總統も膝にかすり傷を負い、台湾全土に衝撃が走った。民進黨は投票前夜の総決起集会の中止を発表。国民党の連戦陣営も、総決起集会を中止し、選挙本部に閉じこもる異常事態となった。

四年前、總統の地位を争って共倒れした国民党の連戦候補と無所属（のち親民党）の宋楚瑜候補は、政権奪還のため、連戦を總統候補に、宋楚瑜を副總統候補にして共闘。万全の布陣で總統選に臨んでいた。各種世論調査でも優勢に選挙戦を進めていたが、この銃撃事件で先がまったく読めなくなった。

テレビは、奇美病院前で陳總統の容体を案じる支持者たちの姿を延々と映し続けた。どのチャンネルを回しても、どこも同じニュース。台湾全土がおかしくなっていた。

翌二十日、選挙は予定通り行われた。人々は何者かにとりつかれたかのように押し黙って投票所に向かった。投票所周辺のあちこちで、知人を見つけてはヒソ



2004年總統選挙で、陳水扁・呂秀蓮正副總統候補銃撃事件が起きた台南市中華路三段。事件の跡形は整理され、なにごとも無かったかのような光景だった。事件直後の3月下旬撮影。

ヒソ話をする有権者たちの姿。これまでいろんな選挙を見てきたが、こんな選挙は初めてだった。

幸い、陳總統は軽傷だった。奇美病院で陳總統の腹部を横断した銃弾は、皮膚とお腹の筋肉を横一文字に裂いたものの、傷の深さは1センチ5ミリ。内臓には到達せず、ただちに縫合手術が行われた。診察した奇美病院の医師によると、陳總統のシャツの内側から、弾丸がボロ



2004年總統選挙投票前日。陳水扁・呂秀蓮正副總統候補を銃撃した決定的場面（台湾のニュース局映像）。映像の瞬間は、呂副總統候補の膝にフロントガラスを通過した流れ弾があたって、痛みを感じた瞬間。幸い、ケガはかすり傷ですんだ。



陳總統の外傷を報ずる地元ニュース映像。陳總統候補は腹部に銃撃を受け、隣の奇美病院で緊急手術を受けた。傷の深さは1センチ5ミリくらい、左右20センチほどにわたって、ご覧のように切り傷のように裂けた。メタボ気味のため、幸い内臓には達していなかった。



総統選挙に不正があったと訴える連戦候補（中国国民党）。連戦候補は4年前に敵味方で戦った宋楚瑜候補と正副総統候補を組み、万全の陣容で選挙戦を戦った。下馬評は優位だったが、土壇場で惜敗した。連戦候補は、投票前夜に陳総統を襲った銃撃事件に不審な点があることや、投票所管理、とくに投票用紙をめぐる不正があったとして、選挙無効を求める国民運動や裁判闘争を展開した。写真は投票翌日、総統府前の車上で、アジ演説の合間に側近の耳打ちを聞くときに見せた表情。前夜眠れなかったのか、目がクマになり、怨念で鬼のような形相になっている。



2004年総統選挙翌日。総統府前に集まり、陳総統の当選はイカサマだと抗議する人々。銃撃事件、投票所管理をめぐる選挙委員会（選管）の不正、文明国の選挙としては、不審な点が多すぎた。



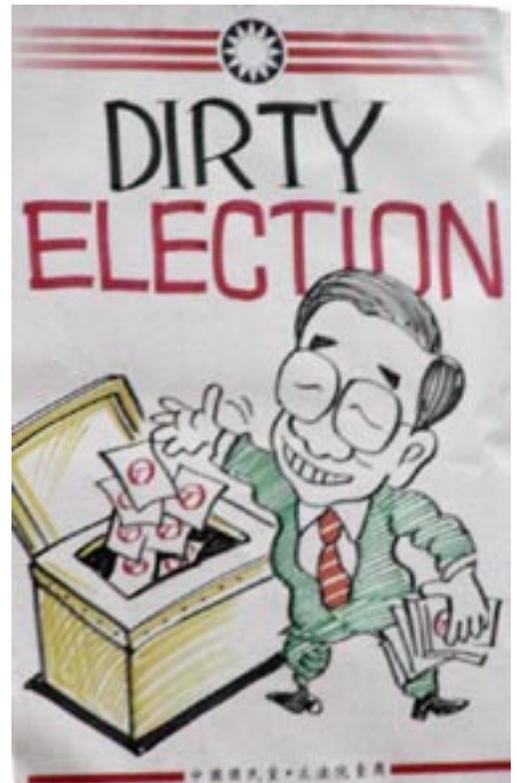
2004年総統選挙で、当選した陳総統当選ステージの歓喜風景も、4年前の革命が起きたような雰囲気とはかなり異なっていた。人々の喜びはどこか表層的で、妙に冷めていた。写真は陳総統らの再選を決めたステージの裏手で見かけた、台湾独立を訴える装飾宣伝カー。

りとひとつ転がり落ちたという。銃撃事件は、有権者の心理に微妙な影響を与えていた。多くの台湾人は、国民党一党支配下の白色テロで不合理的犠牲を強いられた生々しい記憶を持っている。銃撃事件は、過去の忌まわしい記憶を呼び醒ますにじゅうぶんだった。

投票結果は、陳総統・呂副総統候補の逆転勝利。対する連戦・宋楚瑜正副総統候補との票差は僅かに〇・二％という僅差だった。勝利した民進党陣営のステータスは機動隊とガードマンが固める厳戒体制。喜びに沸く人々の表情も、4年前の革命でもおこったかのような熱狂はな

く、どこかこわばっていた。異様な冷めた空気が支配していたことを、つい今しがたの出来事のように思い出す。

今世紀に入り、台湾経済は大きく冷え込み、産業の空洞化が進んだ。当初は「全民政政府、新中間路線」を語っていた陳総統だったが、外交では中国から徹底的に無視された。政権がこれといった成果をあげられないなか、銃撃事件は不利な情勢を覆す働きをしたのだった。



不正選挙を諷刺する漫画ポスター。陳総統陣営が、投票用紙を大量に偽造し、不正な票を投票箱に混ぜ込んだなどとする事件が、各地で報告されていた。

◆百万人民倒扁—台湾版「紅巾の乱」—

二〇〇六年十月十日、台北駅前には赤いTシャツやポロシャツ姿の人々が埋め尽くされた。赤い色は歴史的にひろく民衆運動の色として使われてきた。陳總統の辞任を求める百万人民倒扁運動の呼びかけに呼応したのだ。人々は音楽に合わせて、「阿扁、下台！」（陳水扁辞めろ！）を繰り返し、歌ったり踊ったり。その数はじつに数十万人。

陳總統の辞任を求める座り込みを呼びかけたのは、施明德元民進黨主席。若くして独立運動に走り、四半世紀を緑島の獄中で過ごした伝奇中の人物だ。釈放後民進黨に加わり、一時は主席もつとめたが、陳政権の誕生とともに党を離れ、その後は無党派で立法委員選挙や高雄市長選挙に出馬し、いずれも惜敗していた。

陳政権成立後、民進黨や陳總統周辺にも金権スキヤンダルが続出した。〇二年暮れの高雄市長選挙では、現職の謝長廷市長夫人に収賄疑惑が噴出。その直後の高雄市議会議長選出をめぐる贈賄賄事件では、民進黨市議にも多数の逮捕者が出た。〇四年春の總統選では、トンテックグループが民進黨に多額の政治資金を提供していた事実が発覚。〇六年五月には陳總統娘婿の趙建銘医師と父親が、台湾土地開発株のインサイダー取引で逮捕、起訴され、地裁・高裁とも有罪となった。そして陳總統の呉淑珍夫人にも、太平洋そごう百貨店株の不正取得疑惑が噴出。同年十一月に発覚した總統府機密費



の不正流用疑惑では、總統府秘書らと共に呉夫人も起訴されるという前代未聞の事態となった。この時檢察は、「陳總統も起訴すべきだが、憲法五二条の規定で現職總統は起訴できない。辞任したら逮捕する」と言明していた。

政権交代後、民進黨執政の無策がたたき、台湾経済は低迷。産業の空洞化が進んだ。ファーストファミリーに相次いだ金権疑惑に、人々の気持ちは、すっかり陳總統から離れて行った。

2006年10月10日 国慶節（双十節）の台北駅前を埋めつくした陳總統辞任を求める市民たち。全員が民衆運動の象徴カラーである赤シャツをまとい、親指を下に突き立てて、陳總統の辞任を求めている。



2006年10月10日 陳水扁の辞任を求める百万人民倒扁運動の「天下圍攻」（總統府包圍行動）のため、炎天下のなか、台北駅前を埋めつくした数十万の市民。



2006年10月10日、陳水扁總統の辞任を求める「天下圍攻」でデモを行い、台北有数の繁華街、新興復興駅前で小休止。宣伝車から降りて、座り込みを始めた施明德總指揮（百万人民倒扁運動總指揮、元民進黨主席、ノーベル平和賞候補者）。

○六年八月、施明德元民進黨主席が陳總統の辞任を求める座り込みを提唱。初日の九月九日には台湾各地から九万人（警察発表、以下同じ）の人々が集まった。その後も参加者は増え続け、九月十五日には降りしきる雨のなか三六万人の市民が参加。「紅花雨」や「倒扁行動曲」などの愛唱歌も生れた。坐り込みはその後台北駅前に移して続けられ、十月十日（双十節）の「天下圍攻」にも十二万四千人が参加。總統府の国慶式典会場でも、野党系の来賓らが赤シャツ姿で会場に飛び出し、陳總統辞任を求めるデモ行進を始めるハプニングがあった。百万人民倒扁運動はその後も続くが、長期化とともに野党の政治介入が目立ち、混乱の中で終息した。しかし台湾現



代史上初めて無党派主導による民衆運動の成功させ、施明德はこの年のノーベル平和賞候補にもエントリーされた。

百万人民倒扁運動の愛唱歌となった童謡「紅花雨」の歌詞をプリントした赤シャツを掲げる婦人たち。2006年10月10日台北駅前のステージ近く。



地方から「天下圍攻」のために馳せ参じ、台北駅前前でデモ行進の練習をしてはしゃぐ老人たち。陳總統の辞任を求める運動に、人々は嬉々として集まってきた。

国慶（双十節）式典開場の總統府周辺は、有刺鉄線を張りめぐらした厳戒体制。百万人民倒扁運動の市民たちは、陳總統ファミリーの汚職腐敗に対して、ポスターで「終身禁固」を宣告。有刺鉄線に囲まれた總統府前に張りだした。これを見て通行人たちは大爆笑。このポスターの前で記念写真を撮るカップル、家族連れ、職場の仲間などが絶えなかった。





◆台湾情結と日本情結―日本人の台湾観―

〇七年五月、台湾の李登輝前総統は退任後三度目となる日本旅行を実現。初めて成田空港から東京入りした。中国政府の激しい反発を招いた〇一年四月の日本旅行の時には、持病の心臓薬治療のため、岡山倉敷の病院を訪問するという口実で、関西空港から訪日。日本政府から一切の政治活動を封じられ、大阪のホテルでは缶詰状態だった。〇四年十二月の二度目の日本旅行も混乱を避けて中部国際空港入り。台湾人観光客の受け入れに実績のある能登和倉温泉の加賀屋旅館に泊まり、京都では清水寺を参詣。京大時代の恩師と旧交を温めたが、母校京都大学は、安全上の理由から李登輝の訪問を受け入れなかった。

三度目の日本旅行は、都内の芭蕉記念館を起点とする『奥の細道』探訪の旅。立石寺、中尊寺などを訪ねた。台湾に戻る前日には、南方で戦死した兄が合祀されているという靖国神社参拝を実現。「岩里政男」の悲願が実現した。一度目、二度目に比べて三度目で中国政府の反発が弱まったのは、台湾での李登輝の政治的影響力が著しく低下したためだ。台湾メディアは李登輝の訪日カードを「日本牌」と呼ぶ。李登輝は訪日を語ることで、はじめてメディアの注目を浴びることができるのだ。

いっぽう、李登輝とは異なる対日感情を抱く台湾人もいる。元女優の高金素梅（チワス・アリ）立法委員（無党団結連盟所属）がその人だ。高金議員はタイア族出身。大阪地裁、大阪高裁で、台湾人戦没者の靖国神社合祀取消を求める訴訟を続けてきた。本人や遺族の意思を無視して合祀された祖先の霊を靖国神社から引き取り、台湾の故郷に連れて帰るのが彼女たちの悲願だ。

台湾はかつて日本の植民地だった。激しい民族的抵抗と対峙した朝鮮とは異なり、清朝から「化外の地」扱いされてきた台湾は、比較的抵抗も少なく、日本の植民地統治で文明に浴した側面もある。とくに一九四〇年代に普及した日本語教育により、台湾には「日本語人」とも呼ばれる老人たちの一群が存在する。今も李登輝前総統は、山間部の原住民地区を日本語で遊説するという。なぜなら日本語が彼らの共通語だからだ。

戦後の国民党統治のもと、二二八事件や白色テロなどの迫害や差別を受けてきた台湾の老人たちは、日本の統治を懐かしがり、日本人に強い親しみの態度で接してくれる。これを「日本情結」という。日本人のなかにもこうした台湾人の態度を心地よく思い、「台湾は親日、中韓

念願の成田空港からの訪日。東京の芭蕉記念館でこの機嫌の李登輝前総統。このあと、「奥の細道」を訪ねて奥州旅行へ。2007年5月筆者撮影。台湾における「日本語人」「日本語世代」の代表。日本人の台湾観に大きな影響を与えたのは事実だが、台湾のすべてのイメージを李登輝に代表させてしまったのは、明らかに誤りだった。



は反日」などと決めつける手前勝手な輩が数多く存在する。こちらを「台湾情結」というが、彼らには本当の台湾像が見えていない。こうした日本人の錯覚を政治的に利用してきたのが、写真の金美齢国策顧問ら、台湾独立派の人々だ。李登輝の『武士道』、司馬遼太郎の『台湾紀行』、小林よしのりの『台湾論』につらなる政治的な文脈がそれだが、これらはいずれ

もプロパガンダであって、台湾の一面面をあらわしているにすぎない。日本語の「語りべ」の言葉だけを鵜呑みにすると、台湾を正確に理解したことにはならない。

2005年 東京新宿の市街地をデモ行進する台湾独立派と、彼らといつも行動を共にしている「維新 政党新風」、「ニセ国民新聞」など、日本の右翼団体活動家の面々。先頭には、なぜかチベット独立派の「雪山獅子旗」も発見。台湾独立派とチベット独立派はかねてから親密で、東京・大阪でのデモではいつも一緒に歩いているところを見てきた。どうりで、長野の聖火リレーでも、チベット出身の台湾在住独立運動家が逮捕されたわけです。



靖国神社に合祀された祖先の霊を取り戻す裁判闘争を行っている台湾原住民のリーダー、高金素梅立法委員（無党団結連盟）と来日した原住民の仲間たち。2006年8月15日、明治公園の特設ステージで。彼女は原住民名を「チフス・アリ」といい、女優を経て、現在は立法委員（国会議員）。小選挙区が導入され、議員定数が半減した2008年1月の選挙でも、激戦を制してみごと再選を果たした。いま話題の映画、『靖国』にも主役級で出ていますね。



2001年暮れの立法委員選挙は、国民党が多数を占める立法院の会派構成を変えるチャンスだった。宋楚瑜の親民党、李登輝の台湾団結連盟（台連）など、新政党もその力量を試された。在日台湾人の金美齢女史は、陳水扁政権の国策顧問なのに、なぜか民進党ではなく、李登輝の台湾団結連盟を応援。より台湾独立の旗幟がはっきりしているのが理由だとか。で、「金美齢といく頑張れ台湾ツアー」の老若男女を一緒に登壇させて演説。ここまで踏み込むと、明らかに内政干渉。金女史は台湾人だから良いとしても、「日本人よ、恥を知れ」と言いたくなる一幕だ。



李登輝前大統領の靖国神社参拝。2007年6月、「奥の細道」旅行から帰京した李登輝前大統領は、帰国直前の7日に靖国神社参拝を強行。参拝殿入口には、大勢のカメラマンが詰めかけた。写真を見ても判るように、夫人のほか、三浦朱門（前文化庁長官）、曾野綾子（作家）夫妻らが同行。李登輝はかつて旧日本軍の将校だったうえ、兄を南方戦線で失っている。参拝を終えた李登輝前大統領は、宮司に感謝の言葉を述べながら、ハラハラと涙を流したという。

◆新台湾人の逆襲―馬英九時代の兩岸関係と日本―

○八年三月二日に投票された台湾総統選挙は、国民党の馬英九、蕭萬長正副総統候補が、各種世論調査の予想に違わず強さを発揮し、台湾全土でほぼ六割程度の得票を得た。国民党の弱点とされた南部でも台南市、嘉義市でも民進党を凌ぎ、過去最高の七六五万八七二四票を獲得し早々と当選を決めた。対する民進党の謝長廷候補は一月の立法委員選挙の民進党票を上積みする四一・五五%の得票を得て、高雄県、嘉義県、雲林県で優位を奪還するなど善戦したが、陳政權のもとで進行した経済低迷、総統ファミリーの金権腐敗に対する批判をはね返すことができず、五四五万五二二九票と、遠く及ばなかった。

国民党は一月十二日の立法委員選挙でも大勝し、全議席の三分の二以上を占める八一議席を獲得していた。総統を罷免する権限を得たうえ、無党団結連盟と親民党の四議席を加え、全議席の四分の三に到達。憲法改正を發議できる強大な権限を掌中にした。総統に任免権がある行政院（内閣）と立法院（国会）が同一政党の手に握られたことで立法と行政のねじれた関係を解消。対中関係の改善をテコに効率ある政局運営が期待される。

当選した馬英九総統は五七歳。中国湖南省籍で、香港生まれの外省人。台湾大学法学部卒業後、米国ハーバード大学大学院に学び、米国で弁護士修行のち台



湾に戻り、蔣経国総統のもとで英語通訳をつとめた。法相をつとめたのち九八年の台北市長選挙で現職の陳水扁総統を破り当選。二期八年をつとめた。

副総統に当選した蕭萬長は六九歳。南部の嘉義市出身の本省人で、台湾大学で国際関係を学んだ。国民党きっての経済通で、公約の「台中共同市場」はかねてからの持論。懸案の「三通」（台中間での通信・通商・通航を直交すること）や、月三千人の中国人観光客の受け入れなどは、急速に進みそうだ。

地元報道では、行政院長（首相）には劉兆玄氏が内定したという。本命視されていた江丙坤氏は海峡兩岸基金会主席のポストに就くという。東大卒で日本語もできる江氏の横滑りは、馬政權がいかに対中関係を重視しているかを示すもの。いっぽう、対日関係は相対的に軽くなるだろう。陳政權のもとでは羅福全、許世楷といった独立運動指導者が駐日代表を歴任してきたが、このような人事は見直されるだろう。日本との関係では、経済

2008年総統選挙に勝利した馬英九、蕭萬長正副総統候補の万歳ステージ。馬英九候補の得票は、総統を直接選挙で選ぶようになったなかで、過去最高の得票を記録した。この日、当選のステージには防弾ガラスの付いた演台が用意され、最前列に陣取るカメラマンは、すべて警察のビデオカメラで面割りが行われていた。このような周到な安全確認を経て、OKサインが出たのだろう。最後のこの場面だけは、馬英九が前に進み出て、ご覧のような万歳シーンと相成った。



2008年総統選挙投票前夜、総統府前のケタガラン通り特設ステージで開かれた馬英九陣営の総決起集会では、陳水扁政権のもとでの経済停滞から脱却しようと、景気のいいスローガンがステージに並んだ。写真はミュージカル仕立てで、新政権のもとでの経済発展、暮らしの改善を呼びかけるステージ。中央で馬英九に扮しているのは候補者本人ではなく俳優である。



馬英九候補の当選を、花火で祝福する女性たち。当選ステージのあった西門町一帯は台北有数の若者の町。この夜は、このような光景がいたるところで見られた。



中華民国台湾は、「国旗」である青天白日旗と、国民党のシンボルマークの意匠を共有している。写真の少女の耳は、国民党のマークをあしらったもの。馬陣営の支持層には、高学歴層や若者が目立った。



2007年、都内で行われた故椎名素夫参議院議員を偲ぶ会に、陳水扁総統の名代として参列した謝長廷民進党総統候補（元行政院長、前高雄市長）。謝長廷は京都大学大学院で法学を専攻。京都の中華料理店で出前をしながら糊口した苦学生だった。日本語は上手ではないが、会話にはまったく問題がない。

総統選では、陳総統の悪評がたたって、前面に出たのは1月の立法委員選挙後。善戦空しくの敗戦に、本人は「時間が足りなかった」と悔やんだ。

関係をベースにした、より実務的なものになるはずだ。

総統選挙に敗れた民進党の再建は深刻だ。民進党は立法委員選挙で二七議席の小党に転落しており、財界からもそっぽを向かれ、政治資金も枯渇している。陳総統が党利党略で導入した小選挙区制が裏目に出て、「一党独大」となった国民党政権に太刀打ちできなくなった。馬政権に大きな失政がないかぎり、政権奪還はおろか、当分は勢力挽回もままならないだろう。



2000年3月の陳總統當選ステージで紹介された家族。白色テロで両脚を失い車椅子生活を仕切られている吳淑珍夫人、長男の陳致中、長女の陳幸杼。致中は台湾大学生だったが、兵役を経て、米留學で知り合った台湾人女性と結婚した。幸杼は医大生で、のち台湾大学の医師だった趙建銘と結婚。この趙建銘医師が、インサイダー取引問題で逮捕、起訴されたのを端緒に、ファミリーには、さまざまな汚職腐敗事件が続出することになった。いまやこの家族を祝福する台湾人はいないであろう。



2007年10月10日、在任期間最後の國慶節（双十節）に臨む陳總統。この日難壇に姿をみせたのは、このときのほんの短いスピーチだけ。13年ぶりという軍事パレードも、「國家元首」の閱兵なき開催となった。總統府の屋上には狙撃手が用意されるといふものものしい雰囲気の中、式典は前年のような波乱もなく、肅々と進んでいった。



陳總統の生家。かつてのあばら家は、綺麗に裝飾され、いまは無人。24時間警察官が警備しており、自由に立ち入ることはできない。貧しい小作農だった生家は、借金が絶えず、当時の家の壁には借金の証文が書きつらねられていたという。陳總統はこの貧しい環境のなかで育った。幼いころから神童、秀才と稱賞され、台湾大学法学部を卒業。弁護士時代に美麗島事件の弁護を手がけたことから、政治家に転じた。

蒋介石・蒋経國父子の墓がある桃園県の慈湖紀念公園には、台湾全土の学校、公園、公共施設から集められた蒋介石の立像・座像・胸像145体（2008年3月24日現在）が集められている。陳水扁政権が個人崇拜を禁じ壊される運命になったものを、地元の郷長が引き取って移築したものだという。いわば、台湾版「廢仏毀釈」。こうして集められた銅像群。今となっては大変な觀光資源でもある。馬英九總統のもと、早ければ7月から開放されるといふ月3000人の中國大陸觀光客の多くが、この地を訪ねるのではないかと。陳水扁政権の数少ない功績として、歴史に残るかもしれない。



◆「抗戰八年」と「台独八年」——陳水扁政權とは何だったのか？——
国民党は抗日戰爭（日中戰爭）のことを「抗日八年」と表現する。釣魚台（尖閣諸島）領有問題で論文もある馬英九總統は、台北市主催の抗日戰爭展を初日に參觀するなど濃厚な中国エスニックで知られるが、毎年六月四日に行われる天安門事件記念シンポジウムに欠かさず出席するなど、民主派の側面ももつ。

だが、台湾の水を飲み、台湾の米を食らい、家庭教師をつけて台湾語と客家語をマスターしてきた「新台湾人」の馬總統のこと。台湾内部の族群の融和にはこれまで以上に注意を払うだろう。いっぽう陳水扁總統は、当初は「全民政府、新中間路線」を語っていたが、国民党籍の唐飛行政院長が早々と辞任してからは、民進黨単独で組閣する台湾主体路線に転換。台湾正名など、基本教義派

（独立派）の立場から、台湾自立化政策を進めてきた。中華民國のパスポートを台湾名に改訂し、台湾全土の公共施設から蒋介石像が取り除かれた。蒋介石國際空港は桃園國際空港に、中正紀念堂は台湾民主紀念館に改称された。さしずめこれは、台湾版「廢仏毀釈」。今後、台湾の歴史には「台独八年」と記銘されるかも知れない。台湾民主の証のために、民進黨への政權交代は必要だったかもしれ

ない。だが、民主の果実は李登輝政權に先取りされていた。陳總統は独立派政權として、手のつけられることをすべて試したように思える。しかし台湾の現状変更を認めない米國政府に阻まれ、陳政權は駄々っ子のように迷走した。つまり、民進黨政權の誕生は、台湾独立の「終わりの始まり」だったのだ。そして今「台独八年」の終わりの秋がきている。

聖火、聖火

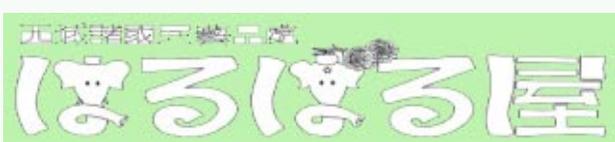
26日、北京五輪の聖火が長野にやってきた。本来これは喜ばしいことであるが、チベット独立派が世界各地で行ったデモで、中国政府およびその国の人々の悩みの種となった。日本でも善光寺がスタート地点を辞退し、聖火リレーのルートがやむを得ず変更された。もちろん、それはお寺さんの自由だと思うが、一方、宗教の本旨に反することとも思わずにいられない。宗教は政治に干渉しない。仁愛や忍耐を美德として、また善行を天下に施すのが本業ではないだろうか。

確かに、中国政府はさまざまな問題がある。人権はまだ十分に保障されず、新聞の自由もない。しかし、五輪の聖火は別だ。それは中国政府のものではなく、世界の人々のものだと思ふ。だから、それを利用して、中国政府に圧力かけるのも違和感が大きい。さらにそれを政治の道具にすることも仏教を信じる人々がやるべきことではない。

聖火を道具に中国政府に圧力をかけることは逆効果だと思う。五輪が開催される期間は短い、そのとき世界各国から中国にたくさんの人々がやってくる。また、それらの人間に快適に過ごしてもらい、中国にいい印象をもってもらうために、中国政府はさまざまな規制緩和も承諾していた。一つの例を挙げると、これまで禁止した雑誌「プレイボーイ」は五輪期間中だけは解禁される。たいしたことないと思われるかもしれないが、中国の人々にとって、画期的なできごとだ。また外来の野放図な文化をノーカットで見られる唯一のチャンスでもある。しかし、聖火リレー妨害を始めとして、五輪を糾弾し、中国政府に圧力をかけると、返って中国政府の態度を硬化させるおそれもある。それが本当なら、世界にとって中国の民主化の発展を大いに促進するチャンスが失われることになる。それこそ、西側をはじめ日本も望んだことではないだろうか。

中国政府はドライバーマとの対話姿勢を打ち出した。これは西側の勝利だと勘違いをせずに、平和的な行動で聖火リレーおよび五輪も成功を祈っていただきたい。

インド・ネパール・アフガニスタン・バリなどなどからはるばるやってきた衣料品・織物・アクセサリ・楽器・CD・DVD、、、が皆様をお待ちしております



<http://www.harubaruya.com/>

180-0004 武蔵野市吉祥寺本町 1-8-3 コスモビル 2階

Phone & Fax. 0422-21-4790

渋谷アムリタ Phone & Fax. 03-3461-6563

吉祥寺別館 Phone & Fax 0422-22-2433

☆はるばる屋通信☆

インド・バリからオリジナル春物衣料品
タイの衣料品 雑貨続々到着中です!!

★ 軽井沢店オープンしました ★
ただし、連休後、7月までは土、日だけ営業します

☆ インド製レトルトカレー好評発売中 ☆

ベリーダンス、インド舞踊のイベントに
商品を持って参加いたします。ご連絡ください。

ネットでのお買物もお楽しみください!

特集「台湾／陳水扁の8年」の執筆者、
和仁廉夫さんのプロフィール:

和仁廉夫(わにゆきお、龍眼)

ジャーナリスト。高校、予備校の教壇を経て現在に至る。主に香港・マカオ・台湾・中国南部・華僑華人世界など中華世界外周部に取材し、その政治、社会、文化の多様性を日本に向けて発信してきた。著書に、『旅行ガイドにないアジアを歩く・香港』(編著、梨の木舎)、『東アジア-交錯するナショナルリズム-』(共著、社会評論社)など。近年は03年秋に中国広東省珠海市でおきた日本企業「幸輝」の集団買春事件を追跡。「幸輝」が訪販りフォームなどの詐欺会社だったことを突き止め、同社経営陣の刑事裁判(京都地裁)を取材中。事件は三井住友銀行などメガバンクに百億円超の損害を与えたコシ・トラスト社の金融詐欺事件ともつながり、かつてない広がりを見せている。詳しくはブログ「龍眼の中華人類学事始」(<http://www.actiblog.com/longan>)を参照。



「微笑みの国 タイ」

アジア文化社
2800円(税込)

タイという国をあらゆる面から紹介する、タイ案内の決定版。在庫僅少です。